

## 英文和訳の日本語力－熊本県立大学の学生の場合

文学部 馬 場 良 二

### 0. はじめに

本研究は、平成16、17年度学長特別交付金事業「熊本県立大学における学生の言語能力調査と研究－日本語と英語について－」馬場良二、吉井誠、村尾治彦、の成果の一部である。この事業の目的は以下のとおりである。

日本人の日本語能力の低下、国際語としての英語能力の欠如が叫ばれて久しい。本学でも英語教育の改革がすすめられ、また、日本語の言語運用能力の向上を目指した方策を取り入れている大学もある。が、肝心の現状把握はなされているのだろうか。その大学の学生の言語運用能力、日本語力、英語力を調査し、分析している例を聞かない。

この研究では、本学学生の日本語、英語における誤用を収集、データ・ベース化し、言語理論の枠組みをもって分析する。日本語、英語それぞれの運用能力の特徴、弱点を明らかにするだけではなく、日本語力と英語力との相関関係にも着目する。従来、外国語習得能力はつきつめるところ母語の能力による、と言われているが、果たしてそれが真実であるのか、考察する。

方法は、本学の学生に英文和訳、和文英訳を課し、その結果の日本語文、英語文をデータ・ベース化、そこから、本学学生が書く日本語文、英語文の特徴、誤用を収集し、分析するものである。

ここでは、日本語力、英語力のうち、日本語力を見ていく。

### 1. 文法項目の抽出

日本語と英語の体系の違いから、日本語を英語に訳す場合に誤りが出やすいだろうと考えられる文法項目、言語要素を選び出した。以下の四つである。

#### 助詞の「は」

助詞「は」の主要な機能に題目化がある。題目となるべき語句に後置され、

その語句が題目であることを示す。一方、英語には語句が題目であることを示す機能に特化した言語要素というものはない。題目となる語句を文頭に置く（語順）、ストレスで示す、‘it is ~ to/that …」などの構文を使う、などの手段で題目であることを示す。

また、日本語では、「今日は学校へ行きますか?」のように、時を示す副詞句が自動的に題目として扱われることが多く、一方、英語では、‘Will you go to school today?’のように時を示す副詞句が自動的に題目として扱われるということはない。題目であることを示す方法だけでなく、題目化するかしらないか、するなら形式連鎖のどの部分を題目化するかという題目化の論理にも相違が見られる。

<A = B>を言語化した時、日本語では「AはBです」、英語では‘A is B’となる。が、日本語の「AはBです」は、Aを題目化した表現であって、「東京は5時です」を見ればわかるように、論理的に<A = B>である必要はない。しかし、英語で‘Tokyo is five o'clock」という文は成り立たない。‘Tokyo’と‘five o'clock」とがイコール関係にないからである。

本研究では、時間、場所の副詞句に後置する「は」、および、<A = B>でない「AはBです」の文を取り上げた。

### 助詞の「も」

「(ウイスキーがボトルに) まだ半分もある」、 「(約束の時間より) 30分も早く来てしまった」のように、量を表わす語に後置されて、話者がその量を「多いもの」としてとらえていることを示す。量が絶対的にどのくらいなのかより、話者がどう受け止めているのかという、話者の心持、modalityにかかわる言語要素である。この言語要素にそのまま相当する英語の言語要素はない。「も」の持つニュアンスを英語に移し、それを日本語に訳し戻す時、どのように訳出されるかを見る。

### アスペクトを示す「~ている」

英語の‘be -ing’は動作の進行を表し、日本語の「動詞+ている」が対応することが多い。が、日本語の「動詞+ている」は、常に動作の進行を表すわけではなく、「電灯がついている」、「窓があいている」など、動作の結果の状態を表すことがある。英語の‘be -ing’と日本語の「動詞+ている」との対応関係のずれからくる、英文和訳の誤用を分析する。

### 助動詞「ようだ」

助動詞「ようだ」は、連用形「ように」、連体形「ような」、終止形「ようだ」が、比況、推量、例示、不確かな断定、婉曲などいろいろな意味、用法で使われる。意味、用法の多様さから、混乱が生じやすいのではないかと考えた。本研究では、「～ようにする」という表現を取り上げた。

調査のための課題文作成に際しては、以上の四項目を盛り込むことにした。

英語文を日本語に訳してもらい、その文章を分析した結果、英語文の人称代名詞をそのまま訳出してしまう傾向、題目文ではない英語文を題目文の日本語に訳出する傾向、時制とアスペクトの混乱、和訳文における待遇表現と modality のバリエーションの多さ、英訳文にはない nominalizer の訳出などの点に関して特徴が見られた。

## 2. 日本語文、英語文

上記の項目を織り込み、日本語文を二つ考えた。以下の通りである。

### 「仕事」<sup>(注)</sup>

今日は、朝少し仕事をしようと思いました。それで、いつもより1時間もはやく会社に行きました。早朝出勤ははじめてです。7時前に行くと、もう黒川さんが来ていました。わたしは、「早いですね」と声をかけました。「仕事が多いときは、残業じゃなくて、朝片付けるようにしているんだよ」ということです。確かに、夜は残って仕事をしている人が多く、能率が上がりません。

時を示す副詞句に後置している「は」は、「今日は／多いときは／夜は」の三つ、 $\langle A = B \rangle$ でない「AはBです」は、「早朝出勤ははじめてです」である。

「私」を動作主とする動詞句は、「しようと思う／行く／行く／かける／片付けるようにしている」の五つがある。が、言語化されている「私」は「わたしは、「早いですね」と声をかけました」の一つだけである。残りの四か所すべてに「私」を入れると以下のようになり、日本語としては不自然になる。

私は、今日は、朝少し仕事をしようと思いました。それで、私は

つもより1時間もはやく会社に行きました。早朝出勤ははじめてです。7時前に私が行くと、もう黒川さんが来ていました。わたしは、「早いですね」と声をかけました。「私は、仕事が多いときは、残業じゃなくて、朝片付けるようにしているんだよ」ということです。確かに、夜は残って仕事をしている人が多く、能率が上がりません。

日本語は、混乱が生じない限り、「私」「あなた」「彼」などの人称代名詞を使わない。言わなくてもわかる場合はくり返さないのである。登場人物は「私」と「黒川さん」の二人がいる。だから、「私」以外に、「あなた」「彼」などの人称代名詞があっても不思議ではない。が、「わたしは、「あなたは早いですね」と彼に声をかけました」とすると、ぎこちない翻訳調となってしまう。「私」と「黒川さん」の二人しかいないことがはっきりしていて、話しかけるのは「私」だから、その相手は必然的に「黒川さん」である。言わなくてもわかることは基本的に言わないのである。

### 「大学」

わたしはこの4月に東京に来ました。大学に通うためです。東京ははじめてです。東京のことは何も知りません。東京は犯罪も多く、あぶないと聞きました。街中を歩くときには、よそ見せず、まっすぐ歩くようにしろと言われました。入学式は9日でしたが、東京にはそれより一週間も前に来ていまました。

時、場所を示す副詞句に後置している「は」は、「歩くときには」東京は」の二つ、 $\langle A = B \rangle$ でない「AはBです」は、「東京は犯罪も多く/東京ははじめてです/入学式は9日でした」である。

「わたし」を動作主とする動詞句は、「来る／通う／知る／聞く／歩く／よそ見する／歩くようにする／言われる／来ている」の九つあるが、言語化されている「私」は「わたしはこの4月に東京に来ました」の一つだけである。一方、「東京」は5回繰り返し現れている。「私」と違って、「東京」は言語化しないと意味が取れないし、繰り返しを避けようと思って「それ」「そこ」などの指示代名詞に置き換えると、不自然か意味がとりにくくなってしまふからである。

それぞれ、翻訳し、英語文を作成した。以下の通りである。

## ‘Work’

I was going to work a little this morning. So I went to work one hour earlier than usual. It was my first time to go to work that early. When I arrived at the company before 7 a.m., Mr. Kurokawa had already arrived. I said to him, “You came early.” He replied, “I try to work early in the morning instead of staying late when I have a lot of work.” It’s true that many stay late to work (overtime), which doesn’t seem to be very efficient.

人称代名詞は、‘I’ が6回、うち「黒川」を示すものが2回、‘you’、‘he’、‘him’ が1回、‘it’ が2回現れている。

現在時制が、‘try / have / is / doesn’t seem’ の4回、過去時制が、‘was / went / was / arrived / said / came / replied’ の7回、そして、過去完了が1回、‘had arrived’、現れている。

日本語文では「能率が上がりません」と言い切りなのに、英訳では、‘which doesn’t seem to be very efficient’ と ‘seem’ が入っている。また、日本語文では単なる否定なのに、英文では ‘not very’ となっている。

「1時間もはやく」の「も」は英語に訳出されない。そこで、次の文「早朝出勤ははじめてです」の訳に程度副詞の ‘that’ を入れ、‘It was my first time to go to work that early.’ とした。日本語文では、「早朝出勤」のように名詞一語で言い表したが、英語文では ‘to go to work that early’ と動詞一補語の分析的な統語構造を含んだ句を使った。

伝聞の表現、「ということだ」は誰が言ったかを問題としない言い方である。英語では、主語一動詞という統語構造を持った ‘He replied’ という表現にした。

「仕事」の日本語文には、「わたしは、「早いですね」と声をかけました」という文がある。英語文では ‘I said to him’ と訳されている。「声をかける」のニュアンスを、英語では誰が誰に向かって言うのかを明記することによってあらわしている。

## ‘University’

I came to Tokyo to go to university this April. This is my first time to live in Tokyo and I don’t know anything about it. I heard that there are many crimes and it’s dangerous to live in Tokyo. I was told that

I should walk straight ahead without looking around when I walk around the town. We had the entrance ceremony on 9th, but I had already arrived at Tokyo a week before.

人称代名詞は、‘I’ が7回、‘my’、‘we’ がそれぞれ1回、‘it’ が2回現れている。二つの‘it’のうち、一つは‘Tokyo’を示しており、一つは‘it’s dangerous to live in Tokyo’ という文の形式的な主語である。

日本語文に「わたし」は一つしかなく、それは英語文の第1文に‘I’ と訳されている。英語文に現れているその他の6回の‘I’ と‘my’、‘we’ とはもともとの日本語文にはすべて言語化されていなかったものであり、日本語文から英語文に訳すとき、英語の体系の中では必要であるとして、訳出されたものである。

「わたしはこの4月に東京に来ました。大学に通うためです。」の2文を、‘I came to Tokyo to go to university this April.’ という1文に、また、「東京ははじめてです。東京のことは何も知りません。」という2文を、‘This is my first time to live in Tokyo and I don’t know anything about it.’ という1文に訳した。

過去時制は、‘came / heard / was / had’ の4回、現在時制は、‘is / don’t know / there are / it’s / walk’ の5回、過去完了は‘had arrived’ の1回である。

「一週間も」の「も」のニュアンスを出すため、‘I had already arrived at Tokyo a week before.’ のように‘already’を入れた。

日本語文には「は」が7回あらわれる。日本語文冒頭の「わたしは」は英語文の‘I’ に、「東京ははじめてです」は‘This is my first time to live in Tokyo’ に、「東京のことは何も知りません」は‘I don’t know anything about it’ に、「東京は犯罪も多く」は‘there are many crimes … in Tokyo.’ に、「街中を歩くときには」は‘when I walk around the town’ に、「入学式は」は‘have’ 動詞の目的格の‘the entrance ceremony’ に、最後の「東京には」は‘at Tokyo’ に訳されている。日本語では「は」がついて題目化されていても、英語では題目化されていないようである。日本語と英語とではいつ、何を題目化するか一致するとは限らない。

「1. 文法項目の抽出」にあげた、助動詞「ようだ」は、「仕事」では「朝片付けるようにしているんだよ」、「大学」では「まっすぐ歩くようにしろと言われました」として組み込まれている。それぞれ、英語文では‘I try to work

early in the morning'、'I should walk straight a head' となっている。

### 3. 調査方法

調査対象は2004年度入学の新生とした。熊本県立大学文学部の1年生、日本語日本文学科の学生が43名、英語英米文学科の学生が44名である。

日文、英文それぞれ学生を半分ずつ、AとBのクラスに分けた。日文A、日文B、英文A、英文Bの4クラスとした。日文Aと英文Aの学生には、'University'の英文和訳と「仕事」の和文英訳を課し、日文Bと英文Bの学生には、'Work'の英文和訳と「大学」の和文英訳を課した。辞書は見えない。'Work'の和訳は43人、'University'の和訳は44人であった。10月の最初の英語の授業時間の一部を使って、訳してもらい、結果をスプレッドシートに集計してデータ・ベースとした。

本研究では、データのうちの、'Work'と'University'の英文和訳を分析対象としている。

### 4. 個人の例

以下に、本学学生の書いた和訳例をいくつかあげる。

私は今朝 少し仕事を早くもした。だからいつもより1時間早く出勤した。そんなに早く出勤したのは初めてだった。朝7時前に会社に着いた時、すでに倉田(kumoka)氏が出勤していた。私は彼に「早いね」と言った。彼は「仕事が多い日は遅くまで残業するかわりに朝早くから仕事をしようとしている」と答えた。多くの人が遅くまで残業しているのは事実だが、好まないようだ。

#### WORK-1

英語文にある'I'を逐一訳すということをしていない。「私」は冒頭と中ほどとにあるだけである。「私は」をくり返すよりずっとすっきりしている。

'to go to work that early'の'that'の訳し方は、「そんなに」が多い。日本語として「そんなに」はおかしいだろう。「こんなに」「それほど」「あんなに」等などいろいろ出たが、どれも落ち着かない。thatだからというこ

とで、指示詞で対応させることに無理があるのかもしれない。「早朝に仕事へ行くのは初めてだった」という回答があったが、これなら自然である。「あんなに早く仕事に行ったのは初めてだった」という訳もあったが、これは、話しことばで「今日はずっとより1時間も早く出勤したんだ。あんなに早く仕事に行ったのは初めてだった」なら、ごく自然である。

最後の文の‘efficient’の語義がわからなかったようで、‘not efficient’を「好まれない」と訳している。

私は今朝 少しでも早く仕事へ行くことにしていたので、いつもより1時間早く仕事へ行きました。こんなに早く出勤したのは、これが初めてです。7時前に私が会社へ着いた時、黒川さんはすでに来ていました。「君は来るのが早いね」と私が言うと、彼はこう答えました。「仕事がたくさんある時は、遅くまで残るより、朝早く来て仕事をするようにしているんだ。」と。遅くまで仕事があること(つまり残業です)が多いのは本当です。そしてそれは、そんなに効率がいい様には見えません。

#### WORK-2

全体的に逐語訳に近い。‘I was going to’の‘go’を「行く」と解してしまっているため、「少しでも仕事へ行く」という訳になっている。‘that early’を「こんなに早く」、‘This is’を「これが」に訳している。英語そのままの直訳に近く、意味はわかるが、こなれない印象を与える。「彼はこう答えました」の次に発言内容が来るのも、いかにも翻訳といった言い方である。「多くの人」という名詞として使われている‘many’を形容詞だと考えているらしく、多いのは「残業」だということになっている。



私は、今朝少し仕事をすっもりだった。  
 だから、私は、いつもより時間早く仕事場に行った。  
 その日が、私が初めて早く仕事をしに行った日だった。  
 私が7:00前に会社に着いた時、黒川さんは、すでに  
 到着してしまっていた。私は、彼に「早いね。」と言った。  
 彼は、「私は、たくさん仕事がある時は、残業する代わりに  
 朝早くに働こうとしているんだ」と応答した。  
 なさほど、確かに時間を過ぎても多くの残業は、  
 とても効果的である様には思えない。

## WORK-3

‘It was my first time to go to work that early.’ という英文に対し、「行くのは初めてだった」という訳が多い中、「その日が、私が初めて早く仕事をしに行った日だった」と、文の構造を大きく変えている。大きく変えた結果も、こなれた日本語になったかというところでもない。が、全体的にしっかりした訳になっている。「仕事」の「仕」の漢字の旁が、「土」でなく、「壬」になっている。

私は、この4月に大学へ通うために東京に来ました。  
 東京に住むのは私にとって初めてのことで、私は東京について何も知りません。東京は犯罪が多く、東京に住むのは危ないと聞きました。  
 私は街を歩き回るときにはあちこち見回さず”にまっすぐ歩くべきだ”と話されました。  
 私たちの入学式は9日にあるのですが、私は一週間前に既に東京に到着しました。

## UNIVERSITY-1

‘I was told’ を「話されました」と訳している。‘tell’ は「話す」でいいが、この場合の ‘be told that’ は、「言われる」でないといけない。「言われる」と「話される」とでは意味がまったく違うのだが、英文を訳すことに気をとられて、日本語のチェックがおろそかになったのだろう。

最後の文で、「私は1週間前に既に東京に到着しました」としている。これだと、東京に到着したのが「入学式」のではなく、言語主体の「発話」の時点の一週間前と解されてしまう。つまり、‘a week before’ のところを、‘a week ago’ で訳してしまったことになる。日本語のチェックミスか、‘before’ と ‘ago’ とを取り違えたのだろう。

私は大学に行くために、四月に東京へ来ました。  
 私が東京に来るのはこの時がはじめてで、東京のことは何もわかりませんでした。  
 東京では犯罪が多数あり、生活するのに危険があると聞きました。  
 私はその事を自分に言い聞かせ、街を見回る時には真っ直ぐ歩き、あたりをよく見るように心がけました。  
 私たちの入学式は九日にありましたが、  
 私はその一週間前にはすでに東京に着いていました。

UNIVERSITY-2

「私はその事を自分に言い聞かせ、町を見回る時には真っ直ぐ歩き、あたりをよく見るように心がけました」の「その事」とは、関係代名詞の that だろう。英語の関係代名詞を理解していないのだろうか。また、「自分に言い聞かせ」というのは ‘I was told’ の、「町を見回る」は ‘walk around the town’ の、「あたりをよく見るように」は ‘without looking around’ の訳に違いない。明らかな誤訳である。それでも、文意はつじつまが合い、日本語も自然である。英語力はないようだが、出てきた日本語は自然である。知っている語の意味をつなぎ合わせて、それを日本語の体系のなかで文章にしているのだろう。

私は今年の4月に大学に通うため東京に来ました。  
 東京を訪れるのは初めてで何とも知りませんでした。  
 東京は危険がたくさんで住むには危険だと聞いてました。  
 町を歩くと犯罪を見ることが多く行くべきと言われてました。  
 私達の入学式は9日に行われましたが私は既に1週間前には東京に着いてました。

## UNIVERSITY-3

「まっすぐ行くべきと言われてました」とあるが、「べきだ」でなくてもいいのだろうか。舌っ足らずな感じがする。また、「着いていました」が「着いてました」となっている。話し言葉の日本語と書き言葉の日本語との使い分けが不十分なのかもしれない。「危険がたくさんで」というのは日本語として稚拙で、かつ英語 ‘many crimes (犯罪)’ の訳になっていない。「東京を訪れる」というのも「東京に住む」の誤りである。

今年の4月から、大学に通うために東京に来ました。  
 東京に住むのは初めてで、東京のことについて何も知りません。  
 たくさんの犯罪があり、東京に住むのはキケンだと聞いていました。  
 あちこちの街を歩く時にあちこち見ながら歩いてはいけないと言われてました。  
 9日に入学式が行われたのですが、先週東京に着きました。

## UNIVERSITY-4

英語文では ‘Tokyo’ が四つと ‘Tokyo’ を受けた ‘it’ が一つである。この訳では、「東京」が5回繰り返されている。英語と異なり、日本語では「東京」を「それ」では受けられないからである。一方、英語文で繰り返されている ‘I’ は日本語には訳されず、この文章に「私」は一つもない。

## 5. データ・ベースについて

「4. 個人の例」にあるように、まずは、学生各個人が書いた回答をコピーし、保存した。さらに、英文一文一文に関し、回答してくれた学生全員分を一覧にした表を作成した。右がそのサンプルである。一つの英文に対する日本語訳のバリエーションが一覧になっている。学籍番号と氏名はここではふせてある。

右の表は、‘Work’の第一文 ‘I was going to work a little this morning.’ の和訳の回答である。一番下の学生は、「私は」しか回答していなかった。

下の表は、‘University’の第一文 ‘I came to Tokyo to go to university this April.’ の和訳の回答である。‘April’を「春」としている回答が、二つあった。‘April’を「春」だと間違えて覚えているのか、大学に通うために東京にやってきた4月を意図して「春」と訳したのか、どちらかわからない。日本の文化の中では、後者の翻訳は間違いではなく、ここでは誤訳としていない。

I was going to work a little this morning.

学籍番号	氏名	日本語
		私は今朝少し仕事をするつもりだった。
		私は今朝少し仕事をするつもりだった。
		私は今朝、少し仕事をするつもりでした。
		私は、今朝、少し仕事をする予定でした。
		私は今朝、少し仕事をするつもりでした。
		私は今朝早くに仕事に出ました。
		私は今朝、少し仕事に行きました。
		私は今朝少し働く予定でした。
		私は朝、少し仕事をする予定でした。
		私は今朝少し仕事をするつもりだった。
		私は今朝少し働くつもりだった。
		私は今朝仕事するはずだった。
		私は今朝少し仕事をする予定があった。
		私は朝から少し仕事をしなくてはいけなかった。
		私は今朝少し仕事をするつもりでした。
		私は今朝ほとんど働いていませんでした。
		今朝私は少しだけ働く予定だった。
		私は朝少しだけ仕事に行った。
		私は、今日の朝少しだけ仕事をする予定だった。
		私は今朝少し余計に働きました。
		私は今朝少し仕事をしようと思いました。
		私は

I came to Tokyo to go to university this April.

学籍番号	名前	日本語
		4月に大学に通うため東京にやってきました。
		私はこの4月に大学に行くために東京へ来ました。
		私はこの4月に大学に通うために東京に来ました。
		私は大学に通うためにこの4月に上京してきました。
		私は今年の4月、大学に通うために東京に来ました。
		今年の4月、私は大学に通うため東京に来ました。
		私はこの4月大学に通うために東京に来ました。
		私は4月に大学に通うため東京にやってきました。
		私はこの春、大学に通うため東京に来ました。
		私はこの4月、大学へ行くために東京にやって来た。
		私はこの4月に大学へ行く為に東京にやってきました。
		私は今年の4月に、大学へ通うため東京に来ました。
		私はこの4月、大学に通うため東京にやってきました。
		私は今年の4月、大学に行くために東京に来ました。
		私はこの4月から東京の大学に通っています。
		私はこの春、大学に通うために東京にやって来ました。
		私はこの4月に大学に通うため、東京に来ました。
		私は今年の4月大学進学のため東京へ来た。
		今年の4月、私は大学へ行くため東京に行きました。
		私は今年の4月に大学に行くために東京に来ました。
		私は今年の4月に大学に通うため東京に来ました。
		私はこの4月に大学に行くため東京に来た。

## 6. 人称代名詞の訳出について

‘Work’ には、‘I’ が6回現れている。うち2回は ‘Mr. Kurokawa’ のことである。が、日本語訳に「私」は基本的にいない。黒川さんが登場してきた時だけ、どちらが「声をかけた」のか明確にするために訳出すればいい。が、‘Work’ の第二文 ‘So I went to work one hour earlier than usual.’ の訳文で ‘I’ を訳出した回答者は29名 (WORK-3)、訳出せず、主語のない文とした回答者は15名 (WORK-1, 2) である。同じ第四文 ‘When I arrived at the company before 7 a.m., Mr. Kurokawa had already arrived.’ の ‘I’ の場合は、訳出したのが32 (WORK-3)、していないのが12 (WORK-1, 2) である。また、‘University’ の ‘We had the entrance ceremony on 9th, but I had already arrived at Tokyo a week before.’ の ‘We’ は一人称複数の人称代名詞であるが、この文では話者とほかの誰かとをさししめしてはではなく、不特定多数の人間を示している。日本語では「私たち」と言わなくても、誰の入学式かわかるので、この場合の ‘we’ を「私たち」と訳すと唐突な印象を与える。「一週間も前に来て」いたのが「私たち」複数の人間であるように解釈されてしまうかもしれない。が、それを訳出した回答があった：「私たちの入学式」4 (UNIVERSITY-1, 2, 3)、「私たちは」15 (「私たちは9日に入学した」、「私たちは9日に入学式がありました」など)、「私は9日に入学式があったが」1。

‘Work’ の ‘It was my first time to go to work that early.’ の ‘my’ も同様である。英文にある言語要素を、翻訳の際に消してしまうのは勇気が要ることだろう。日本語ではなくてもいい、あるいは、ない方がいい言語要素を訳出してしまう。44名中9名が以下のように訳している。

「私にとって」4 (「こんなに早く仕事に行くのは私にとって始めてであった」など)、「私は」3 (「私はこんなに早く仕事に行くのははじめてだった」など)、「私の中で」1 (「仕事に早くとりかかるというのは私の中ではじめてのことだった」)、「私には」1 (「そんなに早く仕事へ行くのは私には初めての事でした」)。

‘University’ の ‘This is my first time to live in Tokyo and I don’t know anything about it.’ の ‘my’ を見ると、43名中9名が以下のような訳をしている：「私にとって」7 (UNIVERSITY-1、「東京に住むのは私にとって初めてのことで」など)、「私の」1 (「これは私のはじめての東京での生活で」)。

「私は」 1 (「私は、はじめて東京に住むので」)。

そこに 'I' とか 'we'、'my' とあると「私」におきかえたくなる。英語に神経が集中し、日本語のチェックがおろそかになることも考えられる。また、受験英語の影響で、英文にある言語要素はできる限り日本語に移そうとするからかもしれない。

'I said to him, "You came early."' の 'I said to him' の部分の回答は、「私は彼に」 34 (WORK-1, 3)、「私が」 3 (WORK-2)、「私は黒川さんに」 1、「私が彼に」 4、「彼に」 1、「私は」 1、である。二人しかいないので、「私」が主語であることが示されれば、目的語は「彼／黒川」であることは明確なので、「彼／黒川」を言語化する必要がない。「私は彼に」だと直訳調で日本語らしくない。が、「私は黒川さんに「——」と言った」ならまだいい。言語化するなら、言語化するだけの理由がなくてはならないはずで、固有名詞なら、その理由を満たすということなのだろうか。

訳さなくてもいいはずの「私」「彼」を訳出する傾向があるのに、'You came early.' の 'you' は「君」が3人 (WORK-2)、「あなた」が2人いるだけである。会話文なので、普段使っている日本語、人称代名詞を使わない言い方が出やすかったのかもしれない。

## 7. 題目文

時を示す副詞句には自動的に「は」がつくと述べたが、'Work' の第1文の 'this morning' の訳で、「今朝は」のように「は」をつける回答は一つもなかった。これは、文章の冒頭で全員が「私」を題目語としてあげているからである。'When I have a lot of work' も時を示す副詞句である。この回答44のうち40に「とき」があらわれ、そのうちの一つは「たくさん仕事があるときの残業のかわりに」で、残り39のうちの14が「とき／ときに」(WORK-2, 3) で、「は」がつかない形、25が「ときは／ときには」で「は」がつく形であった。どちらかというところ、「は」のついている形のほうが多い。

'University' の 'This is my first time to live in Tokyo and I don't know anything about it.' という文を、43名中25名が、「東京に住むのはこれが初めてで」と訳し、この25名を含めた37名が、「東京で暮らすのは」、「東京に来るのは」、「生活するのは」、「訪れるのは」、「東京に住むことは」、「東京に住むというの」の形で、'to live in Tokyo' を題目化して翻訳している。文脈の中のこの文の意味がそれを要求するのか、あるいは、英文の文型が題目を持った日本語文を要求するのだろうか。

また、‘when I walk around the town’ では、一人だけが「町を歩きまわっている」とのように、「とき」を使っていない。残り42人は使っていて、「ときは／ときには」(UNIVERSITY-1、2、3) が39人、「とき／ときに」(UNIVERSITY-4) が3人である。ほとんどの回答者が「ときは／ときには」と書いていることになる。

同じ ‘University’ の一文 ‘I heard that there are many crimes and it’s dangerous to live in Tokyo.’ の訳でも、‘to live in Tokyo’ は題目化されることが多い。「東京に住むのは」20名、「東京で暮らすのは」3名、「東京で生活するのは」1名である。「東京に住むことは」は6名いた。‘to live in Tokyo’ を題目化していない訳には、「生活するのが」1名、「住むには危ない」7名、「住むのには」1名があった。「住む」とか「暮らす」とかのないものに、「東京には数多くの犯罪や危険がある」、「東京には多くの犯罪や危険がある」、「東京は犯罪が多い、危険な場所だと聞いていました」各1名があり、日本語として誤っている「東京で生活は多くの犯罪がある」という回答もあった。

‘Work’ の第三文 ‘It was my first time to go to work that early.’ の ‘to go to work’ も題目化されやすい。題目を示す「は」が現れる回答が、「仕事に行くのは」18、「仕事へ行くのは」5、「仕事に行ったのは」5、「働きに行ったのは」1、「行ったのは」1、「行くのは」1、「仕事に出たのは」2、「家を出たのは」1、「出勤するのは」1、「出勤したのは」2、「仕事に出掛けたのは」1、「入社するのは」1、「仕事にとりかかるというのは」1、「仕事に行くことは」1、43のうちの41である。残り2のうちの1は「仕事のために早く行くななんて初めてでした」であり、この「なんて」も題目を示していると考え、題目文でない回答は「その日が、私が初めて早く仕事をしに行った日だった」の一つだけということになる。

## 8. 時

‘Work’ の ‘It was my first time to go to work that early.’ の時制は過去である。その訳で、過去としているのは42 (WORK-1、WORK-3)、二人が非過去で訳している。一人は、「このように早く出勤したのは初めてです」、一人はWORK-2である。日本語では、「このように早く出勤したのは初めてです」でも、「初めてでした」でもかまわない。ほとんどの学生が過去時制で回答しているのは、英語文の ‘was’ の時制に引かれたからであろう。

‘University’ の第2文 ‘This is my first time to live in Tokyo and I don’t

know anything about it.’ の ‘I don’t know’ の部分の訳は以下のとおりである。

**現在時制：**「何も知りません」 7、「何も知らない」 5、「全く知りません」 1、「よく知りません」 1、「何もわかりません」 11、「右も左もわかりません」 1、「全然わかりません」 1、「何一つ分からない」 1、「よくわかりません」 1、「わかりません」 1

**過去時制：**「何も知らなかった」 3、「あまり知らなかった」 1、「何も知りませんでした」 2、「どんなにも知りませんでした」 1、「ほとんど知らなかった」 1、「何1つ知りませんでした」 1、「何も知りませんでした」 2

**連体修飾句の中：**「東京に住むのはこれが初めてで、それについていろいろ知らないことがある」 1、「これが私にとって初めての何もわからない東京での生活です」 1

‘I don’t know’ と現在時制であるが、訳には過去が11ある。これは、東京暮らしははじめてだが、来て時間がたっているのだから、何も知らないことはないだろう、今はもう暮らしているのだから、少しは知っているだろう、という類推が働き、「知らなかった」と過去時制にしているのだと考えられる。この類推は日本語の世界の論理かもしれない。

最後の文の ‘We had the entrance ceremony on 9th,’ を ‘had’ なのに、「あります」と訳す人がいる。「ありました」 10 (UNIVERSITY-2)、「あった」 11、「控えていた」 2、「予定であった」 1、「行なわれた」 1 (UNIVERSITY-4)、「でした」 3、「入学した」 1 で、過去時制の回答が29。一方、「あります」 8 (UNIVERSITY-3)、「ある」 4 (UNIVERSITY-1)、「です」 1 で、現在時制が13、「私たちの入学式は9日なのに、私はすでに1週間前に東京についてしまいました」が1である。‘have’ か ‘had’ かには頓着せず、単語の意味をつなぎ合わせ、その結果の日本語が意味をなせば、それでよしとしたのだろうか。

‘University’ の最後の文 ‘We had the entrance ceremony on 9th, but I had already arrived at Tokyo a week before.’ の後ろの文の時制は過去完了であり、解釈が難しい。入学式があったのも東京に着いたのも過去のことであるが、後者の方がもっと古いということを示している。アスペクトを示しているのであるが、日本語ではやはりアスペクトを示す言語要素「～ている」で



示される。アスペクトは文法範疇であり、過去完了という時制も日本語の「～ている」も語彙的意味を持ったものではない。だからだろうか、「～ている」がもれている回答があった：「着きました」4 (UNIVERSITY-4)、「着いた」2、「着いたばかりだ」1、「到着しました」2 (UNIVERSITY-1)、「到着した」1。

英語文作成のもとになった日本語文は「それより1週間も前に」で、その「も」のニュアンスを出すために、英語文に‘already’をいれた。この‘already’を意識したからか、そうではなく、自分の判断でか、「私は1週間も前にすでに」「もう一週間も前に」と「も」をいれた回答があった。

英語はふたつのことがらの前後関係を現在完了、過去完了といった文法的範疇で示したり、‘a week before’などの副詞で示すことができる。日本語は、「～ている」のほかに、「その一週間前」のように指示詞で明示したり、「すでに」「もう」などの副詞のニュアンスや文脈によって示したりする。東京に来たのは入学式の一週間前である、ことを明確にするには、「その一週間前」と「その」をつけるのが有効なのだが、つけているのは14人であった。できごとの前後関係という抽象的なことがらを読み取り、それを何らかの言語形式に移しかえて日本語で表現する。逐語訳ではできないことであり、むずかしいのであろう。

「その」のあるもの：その一週間前に 2、その一週間前には 2、その一週間前にすでに 4、その一週間前にはすでに 2 (UNIVERSITY-2)、その一週間前にはもうすでに 1、すでにその一週間前に 2、すでにその一週間前には 1

「その」のないもの：一週間前に 2、一週間前にすでに 6 (UNIVERSITY-1)、一週間前にはすでに 3、一週間も前にすでに 1、すでに一週間前には 1 (UNIVERSITY-3)、すでに一週間前に 9、一週間前にはもう 1、もう一週間も前に 1、まだ一週間前に 1、一週間も早くに 1、もうすでに一週間前に 2、先週 1 (UNIVERSITY-4)

## 9. 待遇

‘Work’の第五文にある‘You came early.’の訳には、「早いね」から「早く来られているんですね」まで、バリエーションが多かった。「早いね」と訳した学生は、「わたし」と「黒川さん」との関係を同僚で、親しい、と考えたのであろうし、「早いですね」と訳した学生は、同僚だが親しくはな

い、「早く来られているんですね」と訳した学生は、親しくなく、「黒川さん」の方が年上だととらえたのであろう。日本語での、二人の人間の日常的な会話には、必ずその二人の人間関係、上下であるとか、親疎であるとかが反映される。一方、英語では、会話している人間の上下関係だとか親疎だとかは日本語ほどには言語形式化されないようである。あるいは、それを読み取るのはむずかしいのかもしれない。その二言語間の差異、あるいは、二文化間の差異により、「You came early.」という一文から以下のような数多くのバリエーションが生じるのだと考えられる。

### 形容詞文

「早いですね」18、「早いですねえ」1、「早いね」5 (WORK-1、3)

「あなた、早いですね」1、「君は早いね」1

「早かったね」1

「来るのが早いですね」2、「来るの早いですね」1、「君は来るのが早いねえ」1 (WORK-2)

「来るの早いね」3、「来るの早かったのですね」1

### 動詞文

「あなたは早くに来ますね。」1、「君は早く来たんですね。」1

「早くから来られているんですね。」1

「早くきたんですね」2、「早く来たね」1、「早く来たんだね」1

### 名詞文

「早い出勤ですね」1

上記の回答のうち、「早いね」などinformalな形が13、「です・ます」のついたformalな形が29、「来られる」という尊敬表現を使ったものが1、あった。

## 10. modality

‘Work’の第一文‘I was going to work a little this morning.’にある‘be going to ~’は、よく未来をあらわす言語要素だと言われる。が『新英語学辞典』1982、研究社、の「tense」の項を見ると、以下のようにある。

英語の時制を、動詞の語形変化だけから見れば、過去時制 (past tense, PRETERITE TENSE) と現在時制 (PRESENT TENSE; ときに非過去時制 (non-past tense) ともいう) の2種しかない。しかし意味上、

現在と過去に対するものとして未来があることから、迂言時制形式 (periphrastic tense-form) と呼ばれる will、shall と動詞の原形の結合したものを未来時制と考えるのが一般的である。

少なくとも英語学の世界で、‘be going to ~’ は未来時制を示す言語形式とは考えられていないようである。『ライトハウス英和辞典』1984、研究社、の ‘going to’ の項にその語義として、①...しに行くところだ、②...するところだ、③...するつもりだ、④ (意思と無関係で) ...しそうだ、の四つがあげられている。②、④は日本語のアスペクトと、③はモダリティと関連が深そうだし、①は両者と関係がありそうである。和訳の回答を、モダリティを表すと考えられる言語要素を軸に分類してみた。以下のようなものである。

#### 形式名詞 (つもり／予定／はず) + だ

「仕事をするつもりだった」10 (WORK-1、2)、「仕事をするつもりでした」3、「仕事しに行くつもりだった」1、「仕事に行くつもりだ」1  
「働くつもりだった」6、「働きに行くつもりでした」1、「働くつもりでした」1

「仕事をする予定でした」2、「仕事をする予定だった」1

「働く予定でした」1、「働く予定だった」1

「仕事するはずだった」1

#### 形式名詞 (つもり／予定／こと) + 動詞

「仕事をするつもりでいた」1、「仕事をする予定があった」1、「仕事へ行くことにしていた」1 (WORK-2)

#### 動詞の未然形 + 意思の助動詞「う／よう」 + α

「仕事をしようと思いました」1、「仕事をしようとしていた」1、「働こうと思った」1

#### モダリティを示す要素のない例

「仕事に出ました」1、「仕事に行きました」1、「仕事がありました」1、「仕事に行った」1

「働きました」1、「働いていませんでした」1

#### その他

「仕事をしなくてはいけなかった」1

「仕事するはずだった」と「仕事をしなくてはいけなかった」とが一人ずつ

ついる。英和辞典の‘going to’の項に「はずだ」とか「～しなくてはいけない」という意義はない。回答した学生の記憶違いか、よくわからないまま内容全体、文脈からの類推で訳したのであろう。

同じ‘Work’の第六文‘He replied, “I try to work early in the morning instead of staying late when I have a lot of work.”’の‘I try to work’の部分の訳を見てみよう。黒川の発話の文末部分にあらわれる。これを見てみると、「仕事をするようにしているんだ」(WORK-1、2)、「とりかかるようにしています」、「仕事をしようと思ったのです」、「働こうと思って」などがある。これらの述語動詞部分を取り去って集計すると、以下のようになる。

「ようにしている」21、「よう心がけている」1、「ようにしたい」1

「うと思う」8、「うとしている」2 (WORK-3)、「うと試みる」1  
(私がたくさん働くとき、残業するよりは朝早くから働こうと試みます)

「ことにしている」2、「ことにする」1

「てみる」1、「つもりだ」1

「のです」3 (仕事をするんですよ／働くんですよ／仕事をするのです)  
文の構造を大きく変えたため、発話の文末部分が‘I try to work’の部分の訳となっていないもの。2 (彼は「仕事が多い時は、こうして朝早くに来て夜遅くに帰らなくてすむようにしているんですよ。」とつけた／「仕事がたくさんあるから朝早くから仕事をしないと遅くまで残らなければいけないから。」と彼は答えた。)

‘try’の語義を「試みる」だと覚え、そう訳した学生もいるが、「働こうと試みます」ではいかにもぎこちない。英語におけるこの‘try’は、決してモダリティをあらわす言語形式ではないのだろうが、日本語に置き換えた場合、この‘try’はモダリティを示す要素に訳出される可能性が高い。英語の‘try’が示している意味内容は、英語では dictum、命題的であり、日本語では modus、陳述的なのだと言えるかもしれない。心持ち、modus 的であればあるほど、言語形式での表し方には幅ができ、「ようにしている」、「よう心がけている」から、「のです」のように意味特性のはっきりしないものまでが現れるのである。

「8. 時」で、‘University’の最後の文‘We had the entrance ceremony on 9th, but I had already arrived at Tokyo a week before.’をとりあげた。モダリティの面からこの文の訳を見ると、「～てしまう」が現れていること

に気がつく：「着いてしまいました」3、「着いてしまっていました」1、「着いてしまっていた」1。

『新明解国語辞典 第四版』1989、三省堂、の「しまう」の項には、補助動詞の場合の語義の②として、「予期しない・（好ましくない）結果になる」とある。「好ましくない」と判断した話者の気持ちを表しているわけで、多分にモーダルである。回答者は、文脈から、「いくらなんでも一週間は早すぎた」という印象を持ち、それを「～てしまう」というモーダルな意味を持つ言語形式に訳出したのだろう。dictum、命題は、訳す時に元の文にあることを削ったり、ないことを付け加えたりはしにくいだが、文に加えられているニュアンスとも言えるモダリティの場合、翻訳者の解釈として、訳文に加えることは可能なのに違いない。

「7. 題目文」で‘Work’の第三文‘It was my first time to go to work that early.’を見た。「仕事に行く」「働きに行った」などを名詞化するために使われたのは、ほとんどの場合、「の」であり「というのは」、「こと」、「なんて」が一人ずついた。用言を名詞化するのによく使われるのは「の」と「こと」であり、これらをnominalizerということがある。「仕事のために早く行くななんて初めてでした」の「なんて」は副助詞であり、nominalizerとは言わないが、この文での文法的な機能はnominalizerのそれである。ただ、「の」や「こと」とことなり、「仕事のために早く行くなどというのは」、「嫌だけれども」とか「心外だが」などの心情が込められている。これも、英語文に言語要素としてあらわれているわけではないモーダルな事柄をその和訳に出した例である。

## 11. nominalizer、形式名詞

‘University’の‘This is my first time to live in Tokyo and I don’t know anything about it.’という文の翻訳のうち、「東京に住むことは」が2名いた（「7. 題目文」を参照）。「東京に住むことは私にとって初めてのことで」というのだが、この日本語はおかしい。動詞のto不定詞を名詞的に訳すときには常に日本語の動詞を「こと」で受けるように覚えているのだろう。しかし、日本語において動詞を名詞句とする方法では、「こと」と「の」を後接させるやり方が代表的であり、どちらを使うかには文法的、意味的な法則がある。回答者たちは日本語話者であるわけだが、この場合の「こと」と「の」の使い分けはむずかしかったのだろうか。

同じ‘University’の一文‘I heard that there are many crimes and it’s

dangerous to live in Tokyo.’ の ‘to live in Tokyo’ にも同じことが言える。「東京に住むこと」とした回答が6あったが、これも「東京に住むのは危ない」と、「の」を使った方が自然である。nominalizer の「こと」と「の」の使い分けは日本語話者にとってもむずかしいのである。

‘Work’ の最後の文の訳に、「残業は効率がよくないのが事実である」という文があった。これは幾分こなれない。「残業が効率がよくないのは事実である」「残業は効率がよくないというのは事実である」ならいいのではないか。日本語母語話者であっても、「は」と「が」の使い分けは微妙であるし、「の」と「というの」との使い分けはさらにやっかいである。

「7. 題目文」「10. modality」で ‘Work’ の第三文 ‘It was my first time to go to work that early.’ を見た。nominalizer に「こと」を使った回答があることを述べた：「そんなに早く仕事に行くことは初めてでした」。英語の動詞不定詞の名詞的用法はすべて、「動詞+こと」に置き換えると覚えているのかもしれない。

‘University’ の第二文の ‘This is my first time to live in Tokyo’ の ‘to live’ を「住むこと」と訳している回答が二つあった：「東京に住む事は初めてで」、「東京に住むことは私にとって初めてのことで」。これらの回答者も、同じ nominalizer である「こと」と「の」の使い分けを無視し、英語の動詞不定詞の名詞的用法＝「動詞+こと」、と覚えているのかもしれない。

日本語の形式名詞の「こと」に対応する言語要素というのは英語にあるのだろうか。‘University’ の第二文の後半 ‘I don’t know anything about it.’ の ‘about it’ の訳を見ると、

「東京のことは」 5 (UNIVERSITY-2)、「東京のことについて」 3 (UNIVERSITY-4)

「東京について」 10 (UNIVERSITY-1)、「東京については」 3、「東京に関して」 1

「そこについて」 1 (東京に住むのは初めてで、そこについて私は何も知らない)

「それについて」 1 (東京に住むのはこれが初めてで、それについていろいろ知らないことがある)

「それに関しては」 3 (東京に住むのは初めてのことで、それに関しては全然わかりません)

「その暮らしについて」 1 (東京で暮らすのは私にとってはじめてで、

私はその暮らしについて何も知らなかった)

訳出していない 16 (UNIVERSITY-3)

文の構造を変えている 1 (これが私にとって初めての何もわからない東京での生活です)

「こと」を加えて「東京のこと」としている回答が八つあった。

## 12. 中止法の「て」と「たくさんの犯罪」

‘Work’の第四文の訳に、「会社に着いたのは7時前で、クロカワ氏はすでに到着していました」というのがあった。英語文の直訳だと、「私が午前7時前に会社に着いた時には、黒川さんはもう来ていた」となるが、「午前7時前に会社に着いた時には」という説明的な言い回しを、動詞文を名詞文に変え、中止法の「て」を使うことによって、自分が出社したときの状況を、ちょっとぞんざい、少し不明確に、日本語らしく言い表している。英語をそのまま訳すというより、英語の文章に書かれていることをすくいとり、それを表現するのに適した日本語の形にのせている、といった感じである。

一方、‘University’第三文の‘many crimes’を「たくさんの犯罪」とした回答があったが、これは稚拙である。‘many’はつねに「たくさんの」と訳しているのかもしれない。「犯罪が多い」としなかったのは、英語力の問題というより、日本語力がないからだと解されても仕方がない。

## 13. まとめ

「1. 文法項目の抽出」にあげた四つの項目、助詞の「は」、助詞の「も」、アスペクトを示す「～ている」、助動詞「ようだ」のうち、「助詞の「は」」は「7. 題目文」で、「助詞の「も」」は「8. 時」、「4. 個人の例」で、「アスペクトを示す「～ている」」は「8. 時」で、「ようだ」は‘Work’の中の‘I try to work early in the morning’の訳の分析として、「10. modality」で取り上げた。

「6. 人称代名詞の訳出について」では、英語には必要な‘I’をそのまま日本語の「私」に置き換えてしまう傾向があることを指摘し、逐一、日本文の中で必要か否かを判断すべきであることを述べた。

「7. 題目文」では、どの文を題目文とするかには日英間で論理の違いがあることを述べた。

「8. 時」では、出来事の前後関係という抽象的なことがらを読み取るの

は難しく、それを日本語の形式で言語化するのも簡単ではないことを述べた。

「9. 待遇」では、英語の一文が日本語では、人間関係のとらえ方によって多くの異なるバリエーションに訳出されることを指摘した。

「10. modality」では、一言語から他言語へ翻訳する時には、元の文に対する訳者の解釈が必ず入り、modalityに関するその解釈は幅が広いことを述べた。

そして、「11. nominalizer、形式名詞」では、nominalizerの「こと」と「の」にふれ、その使い分けが日本語話者にとってもむずかしいこと、だからこそ、訳出した日本語自体の推敲とチェックをしっかりとしないといけないことを述べた。

#### 14. おわりに

英語文では、「I」がくりかえされる。これを逐一そのまま「私」に置き換えてしまう傾向が目についた。多くの場合、そうしても、非文にはならない。が、「私」とすると、明らかに冗長なことがある。ここでは、言語化しないとわからない場合は言語化し、言わなくてもわかる場合は、言語化しない、あるいは、言語化してはいけない、とした。では、どういう場合がわかる場合で、どういう場合がわからない場合なのか、また、わかる場合でも「私」と言うことはあり、その冗長な「私」は一体何のために言語化されるのか、今後の課題である。

‘I try to work early in the morning ...’では、「私は仕事が多いときは遅くまで会社に残るかわりに朝早くに仕事をするようにしています」と訳した学生がいた。これだと、「私は」があっても、あまり冗長な感じを与えない。それは、この場合なら、「私」が、題目語として機能していて、あるいは、他の同僚と対比されていて、言語化されるだけの理由を満たしているからである。

「私は」、「彼に」を言語化すると日本語らしくなくなるといったが、「私は彼に「——」と言った」、「私は「——」と彼に言った」、「「——」と私は彼に言った」では、日本語としての落ち着きに差が出てくるようである。日本語は比較的語順の自由度が高いといわれており、語の並び方にはバリエーションがある。同じ語句が言語化されていても、その語順により、日本語らしいか、翻訳調かの差異が生じるのである。

発話の一部分に焦点を当て、題目とするのはどの言語にも見られる行為である。言語により、題目とする時の手段、方法が異なるのは当然である。



が、言語により、発話の一部分に焦点を当て、題目文を使うときの基準が異なるようである。これは言語の形式的な差異というより、その言語を使用する言語使用の際の論理の違いと言ったほうがいいかもしれない。

漢文には訓読と日本語訳の2種類がある。前者も翻訳の一種であるが、普通、翻訳とは考えられない。また、漢文訓読に日本語らしさはあまり求められない。

和訳なら日本語らしい方がいいし、英訳なら英語らしい文章となってほしい。が、今回の英文和訳では、訳されてはいるが日本語らしくない文章、言い回しが多くあった。大学受験の影響もあるのだろう。入学試験では、英文の意味内容が理解できているかどうかだけでなく、英文和訳によって英語力自体、英語の文法に対する知識が身についているかどうかをみようとする。そこで、漢文訓読のようなこと、英語の構造、体系を引きずったまま日本語になおす、ようなことが起きてしまうのである。大学受験はもう終わったのだから、英文和訳の際の日本語文は、日本語の文章として推敲し、日本語母語話者の語感を生かしてもらいたい。

(注)最後の文、第七文、「確かに、夜は残って仕事をしている人が多く、能率が上がりません」は、「残っている人は多いけれども、能率はよくない」と言いたいのだが、日本語がそうになっていなかった。文脈を取り去って、この文だけを見ると、「人が多いから、能率が上がらない」ととれてしまう。連用中止法の「仕事をしている人が多く」だと、前件が原因となって、後件が成立する、というふうに理解されてしまう。

連用中止法によって二文がつけられているのだが、意味的に不明瞭で、「多いけれども」、「多いが」とすべきであった。連用中止法には多くの用法があり、いろいろな場合に使用可能なので、使用頻度が高く、上の文章にも出てきてしまったのだろう。言語能力の調査のための文章に明快でない文をいれてしまったことになる。